

包山楚簡文字字形考

— 戦国に出現した「𠄎」(以)字の變形の字形について —

A study on the script form of Baoshan Bamboo Slips of the state of Chu

新井儀平

Gihai Arai

周知の如くここ数十年間に出土した戦国・秦の簡牘は相当の量にのぼる。戦国から秦にかけては、隸書・草書の起源、書体・字形、書法の変遷などを考究する上で文字発展史上重要な時期にある。この時期の簡牘文字資料の出土に伴い、文字の発展、変遷の様子が次第に明らかになり、その姿には予想を遥かに越える実体が見えてきている。明確に纏めるまでには至っていないが、近年、書体、字形変遷の概念は大きく変わりつつある。

周知の如く包山楚簡は一九八七年、湖北省荊門市の戦国墓で出土。書写年代は戦国中晩期、B C三一六年とみられている。包山楚簡の篆書中には、多種多様な字が存在し、篆書一般の理解や解釈の範囲では説明できない字形や書法の文字が目検できることであり、すでにこうした事に関して拙論でも度々指摘してきた。具体的な例をあ

げれば、かつて「戦国・包山楚簡—篆書中に見える忽卒の文字を中心として—」(『大東書道研究』一九九五)に述べた如く草書の胎動の時期が早くも隸書以前の戦国時代の篆書中にあったということや、それに関連する先の拙稿「龍山里耶秦簡文字字形考」(『大東書道研究』二〇〇六)に記した新事実「線の草書的点状化現象」ということなどもその一例である。

戦国という時代、金文(青銅器の銘文)では到底考えられない事が、簡牘の日常書写体の早書きの文字では発生しているのである。それには簡牘特有の様々な要因が考えられ、変遷の過程における一字一変の進度にも差異があり、文字の姿は複雑な様相を呈している。従ってこの時期の文字資料については一文字ひとつごとに精査をする必要が不可欠になってくる。

拙論では、副題の如く、戦国・包山楚簡に出現した「𠄎」(以)字の、変形した字形に注目、このことに焦点を絞って集中的に考察を試みたいと思う。この文字を取り上げたこと理由をまず一言で以下に記す。金文及び戦国の簡牘に見る「以」の字形は「𠄎」に作り、それによって後の秦代の簡牘に突然的に登場する隸書字形は、「𠄎」(以)に作る。そればかりか秦代に簡牘では「𠄎」字が殆ど姿を消す。そのそれぞれは別なものであつて字形的な関係や字形変遷上の接点は無いためこれまで考えてきた。しかし両者の文字の関係には、そうとは言い切れない状況が見え隠れしてきたので、新ためて精査考究をする必要性が生じたからである。

◇ 金文などに見る字形「𠄎」について

「𠄎」について『説文解字』十四篇下に、「𠄎」は用うるなり。反已に從う。賈侍中説「已意、已の實なり。象形。」とあるが、白川静『字統』では「卜文・金文の形からすれば、明らかに𠄎(目)の象形である。」と納得のいく解説がある。

本題に入る前に、まず金文の字形について目を通しておく必要があるかと思う。青銅器の銘文中における「已」(やむ、すでに)と「以」(イ・もつて)の関係や解釈、品詩的な扱いや慣用上の区別など詳しい事は知らぬが、字形についてだけ言えば、金文では「已」

と「以」は同形で「𠄎」形に作る。その形は西周金文の字形では図1に掲出したような形に作り、基本的には大差がない。後の東周(春秋戦国)金文に至つて字形の変化が顕著に現われる。『商周青銅器銘文選』(馬承源主編)に所載の春秋戦国の青銅器三〇〇数十器をあらためて通覧してみると、銘文中に「𠄎」(以)字を含む青銅器は六十器近くあり、文字の使用例は計八十余字を数える。ついでに記せば、「𠄎」(台)字を「以」の義に用いることもあるようである。「𠄎」字に釈文「以」を付した文字もちなみに五十余字を見る。春秋戦国の金文は、西周金文と違つて地方的な特色や装飾的な文字が発生するなど文字異形の現象が顕著で、この時期特有の姿を示している。

「𠄎」字について特殊な字形を二、三例をあげれば、春秋晩期の《沈兒鐘》(図2)では、銘文中に三字出現するいずれの字も中央が凹んだ変つた形の字形になっている。ちなみにこの曲げ方は、楚国を代表する南土系徐国の《王孫遺者鐘》(春秋BC四二五〜BC四〇二頃)に出てくる装飾的な文字「𠄎」(台)の曲げ方と通ずるものがある。装飾的な字形で知られる《王子午鼎》のような特殊なものも出てくる(図3)。タガネ彫りの金文で有名なものに、鋭くて流麗繊細な戦国後期(BC三二四頃)の《中山王釐鼎》(図4)があるが、この字の形は下部右側本来円い部分を直線に変え、はっ

きりと曲げている。《楚王會志鼎》(図5)は、字形を平たくつぶして円転のリズムが目立ち、同じく楚系文字の《鄒陵君鑑》(図6)などは、左の内側を極端に広く開けた忽卒な書き方で、その書風は金文というより肉筆的早がきの性格が強い。

金文以外のものを参考までに記せば、戦国には見かけない字形が刻された陶製の平板の瓦書《秦封宗邑瓦書》戦国中期(B・C三三四)

陝西師範大学図書館蔵一図7というものがある。この瓦書は一九四八年に陝西省鄠県で出土したとされているものだが、詳細は不明。この中に出てくる字形は、これまで述べてきた字形とはまったく異なるものであり、唐突に出現したかのような感がする。その字形はこれまでと違って偏傍の構造で出来ていて、大ざっぱな見方をすれば、後の「以」(以)字との関係を考えてみたくもなるところだが、接点としての要素が見当らない。これに似た構造で思い出される字に、これより後の秦の《嶧山刻石》の文字「𠄎」がある。この種の文字は極めて字例が少なく、碑刻の多い漢代に至っても篆篆風の篆書や漢篆で刻された漢碑や刻石のいくつかにのみ見ることが出来るものである。また戦国でよく知られたものに《石鼓文》(B・C三七四―唐蘭説)がある(図8)。大篆の代表とされるこの文字は、金文的な響きと後の小篆に見るような気韻とが調和した形で、その字形は金文と基本的に変わらない。『説文解字』に載せる小篆は、

大篆の形を縦長長方形に整理した状態の形で「𠄎」に作る。小篆のこの長方形の字形は、後の漢代の碑刻に至って縦横直線の折り曲げた四角い「𠄎」形に変化する。ちなみに数多い碑刻の中でこの字形を使った漢碑、摩崖は、いくつかを数えるほどである。

◇戦国の簡牘に見る「𠄎」(以)字の形

戦国の簡牘に頻繁に現われる「以」字の字形は、特殊な一部の例外を除いてその多くは「𠄎・𠄎・𠄎・𠄎・𠄎」などの形に作り、字画的に見れば金文一般と類似すると言っていいたいだろう。しかし、日常書写体の肉筆であるが故に、前もって準備して丁寧に記した青銅器の銘文の金文とは記述上の性質が根本的に異なる。簡牘に見る文字の特色は、総体的に右上りで右回転が旺盛であり、早がき、忽卒の感が否めない。戦国の簡牘《信陽長台閔楚簡》、《江陵望山一号墓楚簡》、《江陵九店東周墓竹簡》そして《郭店楚簡》や《包山楚簡》など多くの簡には、そうした共通する楚系文字の特色がみられる。この時期はいわば文字変遷の渦中にあり、「𠄎」(以)字においてもそれがあり、字形が極めて不安定である。《郭店楚簡》(図9)では、右上がつまみ上げたように吊り上り、円転していた上部中央部分が逆に下に反り返り、この形が多く続出する。この形は先に記した春秋晩期の金文《沈兒鐘》(図2)と通ずる所がある。

ところでここに取り上げる《包山楚簡》には、篆書字形「𠄎」(以)と、その後に出現する秦代の隸書字形「𠄎」(以)との接点や関係を考究する上で見過すことの出来ない注目すべき変形の字形が含まれていることである。

◇「𠄎」(以)と「𠄎」(以)の接点を探る

包山楚簡は出土数四四八簡。有字簡は二七八簡。字数一万二千四百字。「𠄎」字について字画が不鮮明でまったく確認出来ないという字は殆んどなく、使用されているこの字の字数は計二〇〇字を越える。まず最初におさえておきたいことは、今わかる限りでは

《包山楚簡》をはじめ戦国には「𠄎」の形の字が存在した例は見あたらず、この形が登場するのは戦国以後、すなわち秦代に入ってからだと言う点である。しかも《龍山里耶秦簡》《睡虎地秦墓竹簡》(これらについては後述する)などに大量に出現する「以」字は例外なく「𠄎」の形で記されていて、「𠄎」字が姿を消しているということがある。ではどんな経緯によって、或いはどんな状況の中でこのような形の字が出現したのか、考究すべき問題点がそこにある。ところで秦以前、戦国の日常書写体の包山楚簡の「𠄎」字の中で一体何が起きていたのか、拡大図版(図10・17)を用いて文字の構造を分析、後の秦代に出現する「𠄎」字との関連の有無について

考察を試みたいと思う。

包山楚簡中に見える「𠄎」(以)字の大半は図10に掲出した如くの見なれた形で、特に変わった所はなく、忽卒早がきの楚系文字一般の形と共通する。図11は、横画の長さが目立つ扁平な字形。包山楚簡中に横画の意識の強い文字が集的に書かれている簡がいくつか存在するので、この字形はいわばその類。図12に出した字形は、一字の中央が押しつぶされたように凹む。この形はほぼ同時期の《郭店楚簡》(図9)に類繁に現われるあの字形と類似する。当時こうした字が普通に通行していたのではないかと思われる。図13・14・15に掲出した字形では、これ以前に目にしたことのない新たな変化が現われる。

図13の字形は「𠄎」字右端で本来円く書くべきところの円転の部分を直線的にはっきりと鋭角に二つに折って突らせる。いわば字画が一画増えた状態に変化する。円い線を折り曲げるこのやり方は、時期的に近い中山王罇鼎にも見えるが、これだけ極端に鋭角に突った曲げ方は、過去に類のないものだ。そうかと思えば図14に出した字形では、なんと驚くべきことに右肩の突った部分で一度筆を離して、明らかに筆を入れ直して二筆に分けて書いている。この字形でこんなことが行われたのは、今わかる限りではこれが初出であり、前例のないことだ。もうこの字形からは、篆書本来の円転に作る字

形の意識はすっかり消えている。このように右肩を二筆に分けて書く字形の変化は、些細なことのようにだが、特筆すべき出来事であり、後に現れる隸書字形「𠂇」（以）字との接点の有無を考究する上で見落せない。つまり隸書字形「𠂇」字の右側は「人」形状に作り、つまり二筆で書くことから字画、字形変遷上での関連性があるのではないかと考えられるからである。ちなみに包山楚簡に出てくる「人」字は、図14―②に掲出した如くの形に作り、右画の終筆が左下に向う傾向が強く、その筆の動きと形は図13・14字形の右肩のそれとどこか通ずるところがあるように思われる。図15に掲出した字形では、また新たな現象が現われる。中央に位置する第二画目の起筆で意識的に圧力をかけて斜めに強く打ち込む。ここでも篆書本来の書法や字形から離れた動きを示す。このやり方は包山楚簡の他の字にも散見する技法（図「別表」参照）の一つだが、その起筆の入れ方や角度は篆書一般のそれとは異なるものであり、篆書概念では説明できないものだ。「𠂇」字変形の要因が少なくともこの塊りのような強い起筆とその篆書らしからぬ打ち込みの角度にあることは一目瞭然である。その事に起因して一字の左右に広狭の差が生じた空間が生まれ、また中心より左の内側に三角状とも円状とも言えるような白い形が発生したことになる。僅かな変化であるが無視できないものを含んでいる。

注目すべきは図16・17に掲出した字形。包山楚簡に出現する「𠂇」字は先に記した如く二〇〇字を越えるが、その中で図16に取り上げた類の字形はこの二字のみ。この変形の字形は篆書本来の書法や字形からすっかり離脱し、想像もつかないほどの別な形にまで変貌している。読むことすら困難な字形にまで姿を変えている。この字形は、もともとは上部に長く伸びていた第一画の線を一気に短縮、その結果字形が低くなり、左側が三角状により近くなった感がある。この字形の姿には、後の秦隸字形「𠂇」の左側の三角状の形との接点を探る上で非常に興味深いものがある。驚くべきことは図17に出した字形。なんと第二画目で明確に斜画を引いて左側に三角状の白い形をこしらえているのである。「𠂇」（以）字でこのように変化した字形は、戦国のこの時期に初出を見るものだ。試みにこの一字を左側の三角と右側の二画を左右に分けて切り離して考えてみた場合、後の秦隸字形「𠂇」（以）との関連性を想定することが出来るのではないか。これまで戦国に通行した篆書字形「𠂇」と後の秦の隸書「𠂇」との関係は、考究されてきたことは無かったように思う。この特殊な姿を示す字形の出現による新事実、両者の間に文字構造的な接点のあったことの前兆を具体的に示すのであると考える。

戦国・包山楚簡に出現した「𠂇」（以）字。変形の字形をさら

に追求するには、資料不足の感があるが、実は包山の文字資料以外にもこれらの文字と同じような“変形の字形”が戦国の当時に通行し始めていたことの事実が少しづつわかってきたのである。そうすると包山楚簡にみる“変形の字形”が、あまり例外的なものではなかったと言うことが考えられるのである。この事について以下に記しておきたい。

包山楚簡より时期的に少し後でBC三〇五頃とされている竹簡（『清華大学蔵戦国竹簡』に所載）や、戦国晩期（BC二七八頃）とみられる竹簡（『上海博物館蔵戦国楚竹書』に所載）などにも包山のそれと共通する字形を見ることが出来るのである。

『清華大学蔵戦国竹簡』（李学勤主編）に所載の竹簡（図18）は、最初に『文物』（二〇〇九・六）に紹介され、後に大冊の専刊が刊行されたことよって知らされ、現在、清華大学出土文献研究保護センター蔵。この簡は、考古学的発掘によるものではなく、清華大学の同窓生の趙偉国氏が香港で購入した竹簡を寄贈されたものとのこと。二、三八八枚。包山楚簡のそれと共通する字は少なくないが、その中に例の“変形の字形”とよく似た字が出てくるのである。図に示したその字形は、包山のそれよりも一段と第二画目が太くて直線的。一字の左側の形は三角的な様相を呈している。

『上海博物館蔵戦国楚竹書』（馬承源主編）に所載の竹簡（図19）は、

一九九四年、上海博物館が香港で購入されたというもので、この文字資料も考古学的発掘調査によるものではなく、現在、上海博物館蔵。刊行されている大冊八巻に出てくる「𠄎」（以）字の合計は四四〇字を越え、包山のそれに酷似する字が少なくない。中に例の“変形の字形”が出てくるのである。この字形では直線部分が増し、字形は篆書本来の形から離れ、篆書特有の円みの線は下部に僅かに残存するだけの状態になっている。包山楚簡と同様に「𠄎」字との距離が近づいていることが読みとれる。また右肩では、一瞬、別の字かと思うばかりの書き方で、完全に二筆に筆路がづれている字が出現、包山の「𠄎」（人）字の形を思い起こさせる。

戦国につづく秦代の文字資料に目を通しておかねばなるまい。この時期の簡牘文字資料としてよく知られているものに《龍山里耶秦簡》がある（図20）。書写年代は、秦始皇帝中国統一後、及び二世時期の頃とみられているもので、時代は書の歴史の上では小篆を中心とするいわば篆書時代だが、秦簡の書体はいわゆる秦隷に属するもの。秦代に至って筆写体の文字は「𠄎」（以）が姿を消し、それに変るような状態で「𠄎」（以）字が通行する。今わかる限りではこれ以前に「𠄎」字が使われた例は見あたらず、「𠄎」字は恐らくこれが初出だろうと思う。偏の三角状の形は、図に示したように定まらず不安定だが、それだけに興味深いものがある。三角の上に

少し点状のついた字もある。ちなみに後の漢隸に見る字形では「以」字の多くは「𠄎・𠄏」などの形に作るが、このように早い時期の秦隸に見る字形の左側の形は三角状である。龍山里耶秦簡のことでついでに記せば、その出土に伴い〈箭牌〉（かまぼこ形の平たい木の札）といわれているものが割れたものも含め四十数枚出土して、そこにいくつか見られない形の字が見える。図21に掲出した字形がそれである。（里耶秦簡積文は「已」、右下を長く伸ばした例は、先に掲出した戦国の瓦書の字と通ずる所はあるものの、偏の形は特殊でどうしてこういう形になったものか、文字の大きい箭牌に集中してこの字が出現する。また、里耶秦簡中には偏旁に分かれた字形に作られているものもあるが、偏の形は、金文の古い形そのまま、文字変遷の流れを異にするものである。その字形は、ほぼ同時期の嶧山刻石に見る小篆のそれと通ずるところがある。一つの記録として止めておく。秦の文字資料でもう一つ有名なものに湖南省雲夢県出土の《睡虎地秦墓竹簡》がある（図22）。書写年代は小篆に代表される泰山刻石が立碑された二年後のBC二一七にあたる。この書体も秦隸に属するもの。書かれている大半の字形の偏の形は少し円みを帯びた三角状態。一字の左右の関係は下部を一つの線でつないだような状態になっている字が少なくない。これについても字形を遡って考えると納得できるものがある。

以上、《包山楚簡》に出現した「𠄎」（以）字の、変形の字形について述べてきた。この字形が一体どういう性質のものなのか、仔細に目を通して判明したことは、これまで想定外と考えていた篆書本来の字形「𠄎」（以）と、後に発生した秦の隸書字形「𠄎」（以）字との関係や接点が浮かび上ってきたことである。戦国に発生した「𠄎」字、変形の字形が、秦の隸書字形「𠄎」の発生にどう関わっているのか、その推移（𠄎→𠄎）の実態を整理して示すと以下のようなになる。

① 一字の右端の円転部分が鋭角に折り曲って突る。② 突った曲げの部分が二筆になる。③ 二筆が離れて別筆になり、ずれが生じて新しい形に変わる。④ 本来低い位置にあった一字の右側の部分が極端に上に吊り上がって形が変化。（包山の「𠄎」（人）字に通ずる形を示す）。⑤ 文字中央の第二画目に篆書書法から離脱した強い起筆の斜画が発生、これに起因して一字の左側三角状の形が出現、後の隸書字形の「𠄎」に通ずる形となる。

包山楚簡の日常の筆写体の「𠄎」（以）に出現した、変形の字形は、戦国当時としてはごく自然な変化の一部に過ぎなかったものかも知れない。しかしその変化の行きつく先は、結果的には「𠄎」（以）字発生のプロセスの「こまになっていったということになる。篆書字形「𠄎」に変わって隸書字形「𠄎」字が出現した

ことの最大の要因は、戦国時代に篆書概念では説明できない突った斜画の当りの強い起筆を用いた書法が発生したことであり、しかも文字変遷の渦中にあるその書法が忽卒の早がきの状態で用いられたということに起因すると考えられるのである。

「𠃉」字と「𠃊」字との直接的な接点、橋渡しとなる決定的な瞬間を示す文字を確認したいところだが、現在わかる限りの文字資料には限界があり、今後の出土文字資料に期待したい。

図1 西周金文



図2 沈兒鐘



図3 王子午鼎



図4 中山王罍鼎



図6 郟陵君鑑

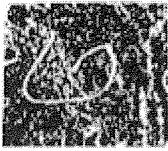


図7 戦国・秦封宗邑瓦書



図8 石鼓文



図5 楚王會志鼎



图11

包山楚簡



114



207



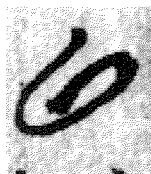
228

图10

包山楚簡



76



157反



249



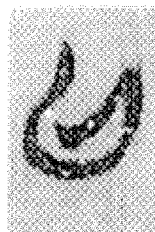
2

图9

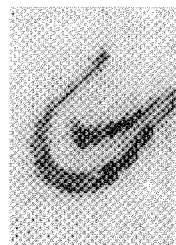
郭店楚簡



15-44



16-3



11-37

图14

包山楚簡



87



139反



249



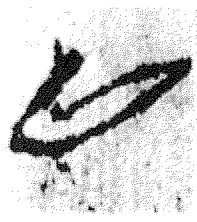
4

图13

包山楚簡



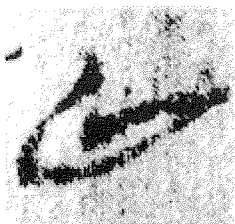
60



212



28



60

图12

包山楚簡



226



231



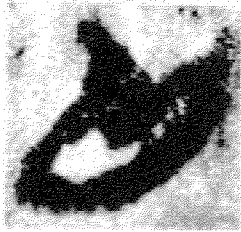
234

图16

包山楚简



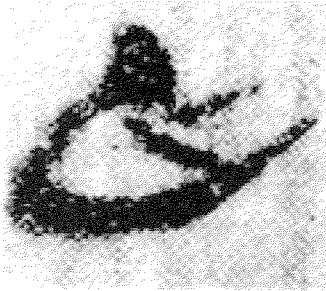
70



90

图17

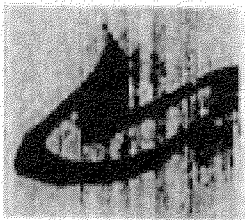
包山楚简



77

图18

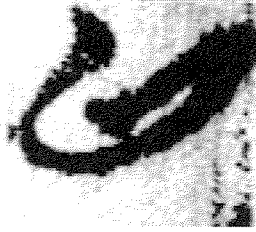
清华大学藏战国竹简



越公其事66

图15

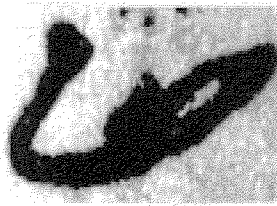
包山楚简



198



81



213



245

图14-②

包山楚简「人」字



225



121



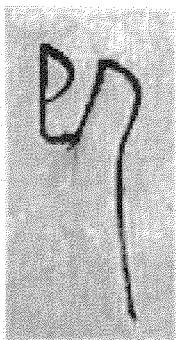
184



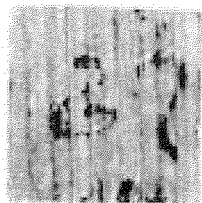
175

图21

龍山里耶秦簡「筭牌」



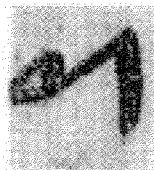
J18-774



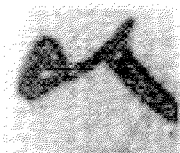
9-904

图22

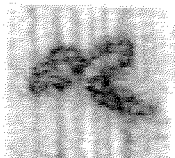
睡虎地秦墓竹簡



法159



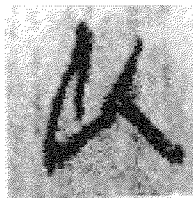
日書乙44



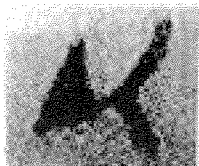
16

图20

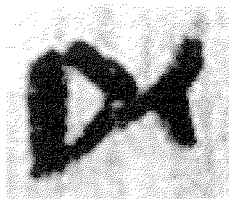
龍山里耶秦簡



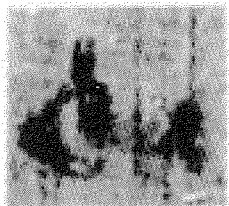
1·9正面



1·9-10正面



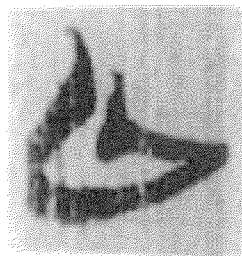
9-11背



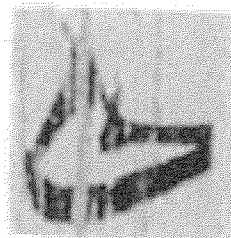
8-1312

图19

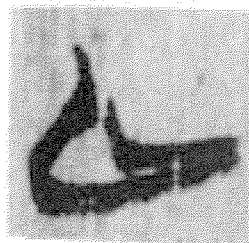
上海博物館藏戰國竹簡



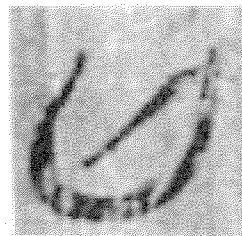
2·6·41



2·6·30



2·7·24

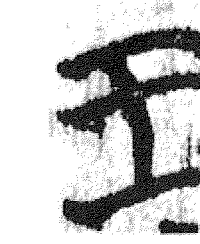


1·1·20

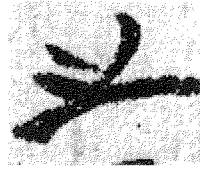
別表

包山楚簡の篆書中に見える起筆の一例

王



之



之



新



公

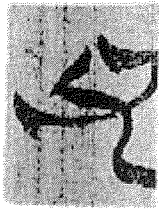


纒



上海博物館藏楚簡の篆書中に見える起筆の一例

父



之



正



從



事

